

# 日本柔道整復接骨医学会誌の投稿規定に関する提案

## Proposals for the Contribution Rules of Journal of Judo Therapy

高橋 憲司 Kenji TAKAHASHI

### 概 要

日本柔道整復接骨医学会誌に掲載済みの英文による論文は、Milan, L. D and Gary, R. B (1998) をはじめ数編あるが、学会誌 22 巻 3 号 (2014) までの学会誌投稿規定には英文で論文投稿する際の記載が無かった。しかしながら、同巻 4 号からその記載が追加された。そこで、22 巻 3 号と同巻 4 号の投稿規定の比較を行い、追加部分を明らかにするとともに、追加部分について考察し、今後の投稿規定の在り方についての提案を行う。日本柔道整復接骨医学会誌の 22 巻 3 号と同巻 4 号の投稿規定を、柔道整復師の教員免許を有する教員 2 名、および柔道整復専攻学生 2 名により、追加文字数及び内容の観点から比較・検討した。学会誌 22 巻 3 号に比べ同巻 4 号の文字数の増加分は 336 文字分（スペース含めない）であった。内容は、主に英文にて論文を投稿する際の原稿の体裁が追加され、注記に「英文にて論文を投稿する場合には、予め、学会誌編集委員会まで連絡すること。また、専門家の native check を必ず受け、その証明書を学会誌編集委員会まで提出すること。」が記載された。また、論文投稿前のセルフチェック表（英文投稿用）が新たに追加されていた。宮崎 (2014) の調査報告では、英語を母国語、第二言語、および外国語として使用する人口は合わせて約 14 億 5 千万人である。一方、日本人の人口は約 1 億 2 千 5 百万人である（総務省）。論文を英文で記載することは、世界中の人に対して情報を発信することができ、情報価値が高いものと判断される。また、投稿規定は和文のみで、英文で記載されていない。英文規定があれば、ネイティブの校正者も規定を理解できるため、論文体裁のチェックも同時に受けることが可能となる。よって、英文での投稿規定の整備が今後必要であろう。

### キーワード

ネイティブチェック (Native Check)、投稿論文 (Submitted Manuscript)、  
共通言語 (Common Language)

### 目 次

- 1 背景
- 2 目的
- 3 方法
- 4 結果
- 5 考察

### 1 背景

日本柔道整復接骨医学会が発行する学会誌において、2014 年 3 月 31 日に発行された 22 巻 3 号までに掲載された英文での論文および教育講座は、表 1 にある通り、全部で 9 編である(学会の論文検索システムを使用して検索した結果)。しかしながら、学会

誌 22 巻 3 号までの投稿規定には、英文で投稿する際の記載が示されていなかった。

その後、同誌 22 巻 4 号 (2014 年 6 月 27 日発行) から、投稿規定に新たに「英文」での投稿に関する記載および「論文投稿前のセルフチェック表 (英文投稿用)」が追加された。これは、筆者が 2014 年 5

表 1. 日本柔道整復接骨医学会誌 22 巻 3 号 (2014 年 3 月 31 日発行) までに掲載された英文による記事

著者 (発行年)	原稿の種類	タイトル
Gray R (1995)	教育講座	Research topics in sports physiology in the united states.
Wallis J (1995)	教育講座	Athletic training in the united states.
Andrew L (1996)	教育講座	Lower limb bio-mechanics theory, assessment and treatment techniques used by podiatrists.
Andrew E (1997)	教育講座	Biomechanical evaluation of the lower extremity and its relationship to sporting injuries of the foot and leg.
Milan. L. D and Gary. R. B (1998)	論文	Physiological effects of short duration aerobic training in healthy adults.
Takise S et al. (1999)	論文	Effect of Exercise on the Vascular Diseases of Hyperlipidemic Rats.
Shacklock M (1999)	教育講座	The role of the nervous system in the treatment of musculoskeletal disorders.
Mitsuhashi et al. (2000)	短報	A study on judo and judo-seifukushi (non surgery) techniques.
Tarumoto et al. (2011)	原著論文	Micro-costing of judo therapy clinics multi-centered cost analysis.

月に英文にて同誌への論文投稿を行ったことが、大きな要因と考えられる。2014 年 5 月に投稿した当時、英文での論文作成は、和文用の投稿規定および Tarumoto et al. (2011)をもとに独自で解釈し、体裁を整えたが、明確な規定がない状態での作業に苦労した記憶がある。英文での記事が掲載された時点で、英文での原稿投稿が予測されるため、投稿者に余計な労力を費やせないためにも、早期に英文での投稿規定を作成すべきだったのではないかと判断できる。

学会誌の投稿規定は、該当雑誌の目的や方針を示すものでもあるため、学の蓄積の上で重要な役割を担うと考えられる。また、富永 (1984) は、国内学協会誌投稿規定の 10 年間の変遷として、昭和 48 年と昭和 58 年の自然科学系主要学協会の投稿規定の比較を行い、学会間で不統一な状態にある項目があり、標準化に向けた組織的活動の必要性を指摘している。自然科学系の研究における成果は、雑誌によって掲載に値する内容ではないと判断されても、他の雑誌では、その成果が貴重な知見として扱われることもある。投稿規定が統一されていれば、投稿者が他雑誌に別投稿する際、対象雑誌に沿った体裁に編集するための労力を省くことができるため、その時間をさらなる研究活動に費やすことができる。その意味でも標準とされる投稿規定に統一すべきであると言える。

雑誌においても時代の流れの影響を受ける。新たなツールが開発・流通・利用されることにより、変

化に沿った対応を行う必要がある。近年の代表的な変化として、電子文献を引用する際の引用方法についての記載があげられる。現在でも、英文校正業者による論文体裁チェックなどの新たなサービスが存在する。時代の流れを敏感に察知し、投稿規定もそれに応じて更新していく必要がある。

以上を踏まえ、柔道整復接骨医学会誌に英文にて論文を投稿する場合に、投稿者の負担を軽減させるためにも、他の学協会の投稿規定と統一的であり、時代の流れに沿った投稿規定の整備が必要であると考えられる。

## 2 目的

本研究では、日本柔道整復接骨医学会誌 22 巻 3 号と同巻 4 号の投稿規定を比較し、変更部分を明らかにし考察するとともに、今後の投稿規定の在り方についての提案を行う。

## 3 方法

### 3.1 調査対象雑誌 (投稿規程)

日本柔道整復接骨医学会誌 22 巻 3 号および同誌 22 巻 4 号の投稿規定

### 3.2 調査者

- ・柔道整復師専科教員免許を有する教員 2 名
- ・道整復専攻学生 2 名

「英文」

- 1) Title
- 2) Abstract (maximum of 400 words)
- 3) Key words (maximum of five)
- 4) Text
  - (1) Introduction
  - (2) Materials and methods
  - (3) Results
  - (4) Discussion
  - (5) Conclusion
  - (6) References
  - (7) Tables and figures
- 5) 和文タイトル
- 6) 和文抄録 (600 文字以内)

注) 英文にて論文を投稿する場合には、予め、学会誌編集委員会 (hensyu@jsjt.jp) まで連絡すること。  
また、専門家の native check を必ず受け、その証明書を学会誌編集委員会まで提出すること。

**※投稿原稿には、著者名・所属機関名・連絡先などを記載しないこと。**

図 1：柔道整復接骨医学会誌大 22 巻 4 号に追加された内容①：英文で投稿する際の原稿の体裁  
 (22 巻 4 号の掲載内容を見やすいように筆者が編集加工し、アンダーラインは、筆者が追加編集した。)

**論文投稿前のセルフチェック表 (英文投稿用)**

日本柔道整復接骨医学会誌への投稿論文は必ず投稿規定に沿うものとする。  
 投稿前に必ず著者がセルフチェックすること。

本文は A4 判の横書きになっているか ..... ☐

英文表題はあるか ..... ☐

英文抄録はあるか ..... ☐

英文抄録は 400 語以内であるか ..... ☐

Key words はあるか (5 個以内) ..... ☐

下記に示す投稿種目を書いてあるか ..... ☐  
 (原著・総説・研究報告・症例報告・研究資料・短報・治療技術・その他)

論文形式は次の順序になっているか ..... ☐  
 1. Introduction 2. Materials and methods 3. Results 4. Discussion  
 5. Conclusion 6. References 7. Tables and figures

文献は投稿規定に沿って記載されてあるか ..... ☐

図表の挿入場所を本文中に指定しているか ..... ☐

図表は投稿規程に沿って作成されているか ..... ☐

ネイティブチェックを受けているか ..... ☐

和文表題はあるか ..... ☐

和文抄録はあるか ..... ☐

和文抄録は 600 文字以内であるか ..... ☐

キーワードはあるか (5 個以内) ..... ☐

投稿論文は未発表のものであるか ..... ☐

日本柔道整復接骨医学会学会誌編集委員会

図 2：柔道整復接骨医学会誌大 22 巻 4 号に追加された内容②：論文投稿前のセルフチェック表  
 (22 巻 4 号の掲載内容を抜粋)

### 3.3 調査内容

調査者 4 名により、日本柔道整復接骨医学会誌 22 巻 3 号の投稿規定を基準として、同誌 22 巻 4 号の

投稿規定の変更箇所を確認する。具体的には、追加文字数および追加された内容について確認を行った。

## 4 結果

日本柔道整復接骨医学会誌 22 巻 4 号には、同誌 22 巻 3 号の内容に 336 文字（スペース含めない）が追加された。具体的には、英文にて論文を投稿する際の体裁に関する記載と英文投稿用の論文投稿前セルフチェック表が追加された（図 1,2）。

特に、体裁に関する記載については、「専門家の native check を必ず受け、その証明書を学会誌編集委員会まで提出すること。」が注意書きで加えられており、併せて、英文にて論文を投稿する際は、事前に学会誌編集委員会に連絡することが明記された。

## 5 考察

日本柔道整復接骨医学会誌 22 巻 3 号と同誌 22 巻 4 号の投稿規定を比較した結果、22 巻 4 号の内容に追加があり、主に英文にて論文を投稿する際の手続きの体裁と投稿前のセルフチェック表に関して記載されていた。また、英文にて論文を投稿する際は事前に学会誌編集委員会に連絡することが記載されていた。

この追加事項の記載により、日本語を理解している研究者が英文で論文を投稿する際の基本事項を確認できるようになった。22 巻 4 号発行以降、筆者が英文にて論文を投稿する際、学会誌編集委員会に連絡することで、追加の注意事項の提示を受けることができ、かつ英文用のセルフチェック表があることで、不便を感じることなく、比較的スムーズに原稿を作成することができたと記憶している。よって、今回のような投稿規定の迅速な見直しは、投稿者にとって有意義であり、編集委員会の対応は適切であったと感じている。

ただし、規定が追加された 22 巻 4 号(2014 年 6 月 27 日発行)の投稿規定の冒頭には、改定の日付が記載されておらず、22 巻 4 号の次号に当たる 23 巻 1 号 (2014 年 9 月 25 日発行) の投稿規定に、「平成 26 年 7 月 31 日改定」と記載されており、22 巻 4 号での規定の追加は、緊急措置であったように推測される。投稿者にとっては、迅速な対応は大変意味のあることであるが、明文化される投稿規定については、学会内でのコンセンサスを十分に得た上で、正式に変更・記載すべきであると考え。今回のような場合は、投稿者のことも踏まえ、内規という形で個別に対応し、学会内で正式な手続きを踏んだ上で正式に改定すればよかったのではないかと考える。今回の件から、学会内での事務処理手続きの煩雑さ

が伺われる。

日本語以外の言語を第一言語とし、日本語を自在に扱えない研究者にとって、内容が追加された投稿規定についても解読が困難であると予測できる。現在、モンゴル国に日本の伝統治療として柔道整復術の普及が行われている（日本柔道整復師会、2016）。

モンゴル国で柔道整復業を行うモンゴル人が実践や研究の成果を公表する際、柔道整復接骨医学会誌が主な公表先になると考えられる。その際、今回のような日本人を前提とした投稿規定では、モンゴル人が原稿を作成することはハードルが高いものとなる。モンゴル国での日本語教育は積極的に行われているといわれているが、日本語を学習しているモンゴル人は 200 人に 1 人の割合とされている（ダンザンニヤム ブレンチメグ、馬場久志、2009）。一方、英語はモンゴル国の第一必修外国語に指定されている(高嶋、2013)ため、日本語学習者よりもその人口は多いと言える。そのため、英語表記での投稿規定の整備も必要であろう。

また、英文表記での投稿規定の整備は、ネイティブチェックを受ける日本人投稿者にとっても有益である。22 巻 4 号の投稿規定には、「専門家の native check を必ず受け、その証明書を学会誌編集委員会まで提出すること。」とあるため、ネイティブチェックを受けることが義務付けられている。英文校正業者にチェックを依頼する際、業者によっては文章の添削に加え、対象雑誌のフォーマットに沿って調整を行うサービスを付加しているところもある（図 3）。

しかしながら、英文表記の投稿規定がなければ、フォーマット調整を行うネイティブのチェック者が、規定の詳細を理解できず、適切な調整ができない。この点からも英文表記での投稿規定の整備が必要となる。投稿者自身の確認に加え、ネイティブチェック者からの確認を受ける環境であれば、より投稿規程に忠実な原稿を仕上げることができる。

宮崎（2014）の調査報告では、英語を母国語、第二言語、および外国語として使用する人口は合わせて約 14 億 5000 万人である。一方、日本人の人口は約 1 億 2500 万人である（総務省統計局、2016 年 6 月現在）。これに、世界各国で日本語を学習している人口約 365 万人（国際交流基金、2016）を加えても、1 億 3000 万人以下となり、英語を使用する人口と 10 倍以上の差がある。

以上のことから、日本柔道整復接骨医学会誌においても英文による論文が掲載されることで、世界中

1 プラン選択	2 ご依頼原稿の分野について	3 依頼原稿の送付とお支払い	4 お客様情報
原稿の分野（学術分野リスト） <b>!</b> 校正者の選出が納品原稿の品質を左右します。 <b>必須</b> 正確な情報のご提供をお願いします。	- Rehabilitation Sciences(リハビリテーシ ▼ Rehabilitation Sciences (リハビリテーシ ▼ その他の専門分野		
ファイル形式 <b>必須</b>	原稿を MSワード ▼ で依頼し納品は MSワード ▼ を希望		
アメリカ・イギリス英語の指定 <b>必須</b>	アメリカ英語 ▼		
原稿の用途 <b>必須</b>	ジャーナル投稿用 ▼		
原稿の種類 <b>必須</b>	Original Article ▼		
投稿予定ジャーナル誌名	日本柔道整復接骨医学会		
投稿規程に合わせたフォーマット調整 <b>!</b> 正確な調整のために、サンプル記事をPDFでお <b>必須</b> 送りください。	はい、ジャーナルの投稿規程に従った調整が必要です。 ▼ 投稿規程のURLをお知らせください。 投稿規程のファイルをお持ちの場合 は、request@enago.com までご送付ください。		

図3：英文校正・英文校閲業者の論文原稿受付ページ

黒枠内は、投稿規程に沿ったフォーマット調整サービスに関する情報を入力する箇所となっている

(Enago homepage より抜粋: filesystem:chrome-extension://fdpohaocaechifmmbbbbknolclael/temporary/screencapture-www-enago-jp-23-htm-1444450887883.png. 閲覧日：2015年6月10日)

のより多くの人に情報を発信することができる。柔道整復学の研究成果に加え、その存在意義を広く多くの人に発信するためにも、英文による論文投稿を推奨し、投稿に関する規定を整備する必要があると考える。

結論として、他の関連学会と投稿規定を統一することに加え、英文による投稿規定を整備・追加することで、柔道整復接骨医学会のさらなる発展が期待できる。

### 引用文献

- 日本柔道整復接骨医学会. 投稿規定. 日本柔道整復接骨医学会誌 22 (3), 113-118. 2014.
- 日本柔道整復接骨医学会. 投稿規定. 日本柔道整復接骨医学会誌 22 (4), 163-169. 2014.
- 日本柔道整復接骨医学会. 投稿規定. 日本柔道整復接骨医学会誌 23 (1), 43-49. 2014.

- 日本柔道整復師協会. モンゴル国 日本伝統治療（柔道整復術）普及事業祝賀会. [http://www.shadan-nissei.or.jp/nissei/detail\\_20161130125823.html](http://www.shadan-nissei.or.jp/nissei/detail_20161130125823.html). (閲覧日：2016年12月1日)
- ダンザンニヤム ブレンチメグ, 馬場久志. モンゴルにおける日本語学習者の現状と課題. 埼玉大学紀要教育学部, 58 (2), 145-157. 2009.
- 高嶋幸太. モンゴル初中等教育機関での授業実践—現状調査を踏まえたチーム・ティーチングの試み—. 立教日本語教育実践学会 日本語教育実践研究創刊号, 63-74. 2013
- 宮崎幸子. 国際化・グローバル化社会における日本の外国語教育についての考察. 日本英語英文学 24, 45-71. 2014.
- 総務省統計局. 人口推計平成28年11月報一. <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201611.pdf>. (閲覧日：2016年12月1日)
- 国際交流基金. 【2015年度「海外日本語教育機関調査」結果（速報）】 <http://www.ipf.go.jp/i/about/press/2016/dl/2016-057-1.pdf>. (閲覧日：2016年12月1日)

(原稿受理年月日 2016年12月12日)